



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

6

バルザック

従妹ベット 西本晃二訳

中央公論社

新集 世界の文学 6

©1968

バルザック

訳者 西本晃二

昭和43年10月1日初版印刷

昭和43年10月10日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 矢嶋製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

從妹ベツト

目次

年譜 解説

560 536 3

従妹ベツト

テアーノ公 ドン・ミケーレ・

アンジエロ・カエターニ閣下⁽¹⁾に捧ぐ

本書に収められたささやかな一断片、人生という長物語の一挿話をお捧げいたすのは、ローマの大貴族としてのあなたにでもなければ、キリスト教界に法王を幾人も出された名門の嫡流たるあなたにでもなく、実に学殖豊かなるダンテの注解者としてのあなたに対してなのであります。

あなたは、近代がもつてホメーロスの大叙事詩に対置することを得る唯一の作品、かの『神曲』をば、イタリヤ最大の詩人がいかに驚嘆すべき思考の骨組の上に構築してのけたか、その骨組をわたくしに垣間見させてくださいました。あなたのお話を拝聴するまでは、『神曲』という作品は、わたくしの目には一個の巨大な謎と映っておりました。その謎を解く鍵はかつて何人によつても見出されたことなく、なかならず注釈者連中ときては、他の何人よりも解決から隔たっているのではありません。あのようにダンテを理解すること、それはダンテと同様の

偉大さを所有することにはかなりません。だがあなたのような方にとつては、あらゆる種類の偉大さもすべてきわめて当然のこと、こと新しく取り立てて言うほどのことではないのであります。

今もしわたくしにしてフランス学界の一員たりとせば、一日のローマ見物を終えてわれわれがくつろぎ憩つたいつかの夕べに、あなたが満座を魅了し去つた即座の靈感に満ちた解釈を一卷の書物に収め、断定的な注解として上梓しさえすれば、たちまち名声を博し、講座を獲得し、数々の勲章を授けられること請け合ひであります。わが国の教授連中の大部分が、ちょうど昆虫が植物に寄生するように、ドイツ、イギリス、東洋、また北国等をお食ひものにしていてという事情を、おそらくあなたはご存じありますまい。そして連中は、まったく昆虫同様、対象とする国々と一体となり、対象の持つ価値がまるで自分の値打のような顔をして得々としていたのであります。ところがイタリヤだけはまだかような公開講座の食いものとされる難を免れております。わたくしが文学的節度を守つたことを評価してくれる人はまずありません。い。ところがもしあなたのお説をそっくり頂戴いたしてしましさえすれば、わたくしにとってシェレーゲル父子三人をあわせたほどの大学者として通用することなぞ、いとやすいことだったのでございます。だがわたくしは、

ただ社会病理学博士、不治の悪弊と取り組む一介の獣医たるにとどまるほうを選びました。それというのも、これが単にわたくしのために案内役をおつとめただいたあなたに対する感謝の念を表わすためだけでも十分意味があると考えたからであり、また音に聞こえたあなたの家の名を、ボルチャ、サン・セヴェリーノ、パレート、ディ・ネグロ、ベルジョイオーゾ(族。パルモイタリアの名流貴で、作品を感呈されている)等々の名前に加えて、もつて『人間喜劇』の中で、フランス、イタリア兩國の間に存する親密かつ絶えることなき絆きずなの証となしと考えるからにはかたまりませぬ。このわれら兩國間の絆こそ、すでに十六世紀において、かの高名なる司教、いとも風流滑稽なる物語の名手バンデルロ師が、その絢爛たる物語集において、同様の仕方で確証してみせたところでありませぬ。ちなみに、シェイクスピアの数々の戯曲は同師の物語集よりその想、いな想のみならず時には登場人物そのものまで、それも言葉遣いもそっくりそのまま引き写しにしている場合が間々あるのでございます。

ここにあなたに献呈いたします二つの素描は、同一の事実が持つ二相、永遠の二相を表わしております。「人間に表裏二面あり」(Homo duplex)とは、すでにわが大ビュフォンビュフォンがいみじくも喝破したところでありませぬ。されば何ゆえわれらもこれにつづいて「事物にも表

裏二面あり」(Res duplex)と申せぬことのありまじうや？ ありとあらゆるもの、美德にさえも表裏があるのであります。それゆえにこそ、かのモリエールは常にあらゆる人間の問題に備わる二面を浮彫りにしてあります。デイドロもまたモリエールのひそみにならつて一篇の物語『これは作り話にあらず』をものしました。おそらくはデイドロの最高傑作と考えられるこの作品において、ガルダヌヌの薄情の犠牲となるド・ランショ嬢の崇高な姿が、愛する女の手にかかつて非業の死をとげる情人の鑑かたみに対置されております。ゆえにわたくしの二つの物語もまた、男女一對の双子同様、対をなすものといいたしました。作者たるもの、ひとたびはかような文学的幻想に身を任せても差し支えはありますまい。とりわけ小説家が、思弁が身に纏うあらゆる形式を表現しようと試みている際に、これはなおさらのことでありませぬ。人間の間さまぎ起る論争というものはほとんどの場合、この世に学者と無知蒙昧の輩とが並び存し、しかもそのいずれも事物や思想の一面のみを見て、これこそ唯一の正しい見方、真実と主張するところによって来たるのであります。ゆえに聖書はすでに「神はこの世をもろもろの論議にゆだねたまえり」という予言を投げかけております。この神のみ言葉の一節を考慮いたすのみにても、ローマ教皇はあなたの方イタリア人に対して、上下両院を

備えた政体を与えるべきであるし、これはまた一八一四年にルイ十八世陛下が勅令の中においてふれられた条文に服する意味からも当然であると私考する次第であります。

なにとぞあなたの才知、あなたの心に宿る詩情にして、『貧しき緑者』を形づくる二つの物語に庇護を垂れたまわんことを。

あなたを敬愛する僕 レキベ

ド・バルザック

パリにて、一八四六年八月九月

memoire の名句を吐いた。

(6) 十七世紀のフランスの喜劇作家、俳優。コルネイユ、ラシースとならぶ古典劇の代表者。鋭い観察眼によって、当時の風俗を諷刺し、また心理の發展に基盤を置いた性格喜劇を完成して後世の演劇に大きな影響を与えた。

(7) 十八世紀フランスの百科全書派の哲学者。ヴォルテール、ルソーらと並んで啓蒙運動の大立者。

(8) デイドロが書いた物語集。ド・ラショー嬢の話は第二話として取められている。表題どおりこれは実話で、ド・ラショー嬢はその熱烈な愛にもかかわらず、薄情な男ガルドイニ——ガルドダンスはバルザックの記憶違い——に捨てられる。

(1) ゼルモネツタ公爵をも兼ね、その妻カリスト・ルツェウスカを通してバルザックの未来の妻ハンスカ夫人とも従兄弟となっていた。

(2) 父ヨーハン・アドルフとその子供ヴィルヘルムおよびフリードリヒの三人。なかでもゲーテやシラー、スタール夫人らと親交のあった大学教授ヴィルヘルムと、ドイツ・ロマン派に影響を与えた古典語学者フリードリヒの兄弟が有名。

(3) マツテオ・バンデリロ。十六世紀前半に活躍したイタリアの物語作家。ポツカッチョの『デカメロン』にならって艶笑小咄を数多く書き記した。自身『風流滑稽譚』をものしたバルザックが私淑し、手本とした一人。

(4) 『従妹ベット』は姉妹篇『従兄ボンヌ』とあわせて、『人間喜劇』の中で『貧しき緑者』という一群を形づくっているから、この二つを指す。

(5) 十八世紀に活躍したフランスの博物学者。その『博物誌』His toire naturelle で有名。「文は人なり」Le style est l'homme

一八三八年、七月も半ばのこと、近ごろパリの街角に姿を見せるようになった「殿様」という新型馬車が一台、国民軍大尉の軍服を着込んだ中背の肥った男を乗せて大学通りを走っていた。

才気煥発、時にはあり余りすぎると文句をいわれるハリっ子どもの中にも、自分は軍服を着たほうが平服でいるよりずっと粋に見えるとか、また女性とは他愛もないもので豪猪そっくりの軍帽をかぶり、軍装をつけた男を見ただけで、もうなんとなく心のときめきを感じるものだなどと、はなはだけしからぬ好みを勝手にご婦人方に押しつけていい気になっている連中がいるから恐れ入る。

第二師団所屬のこの大尉殿の顔つきにも、自分自身に満足しきった様子がありありと見受けられ、それがまだどちらかといえぼぼつてりした赤ら顔に活気を与えていた。商売で一財産築き上げ、後は楽隠居ときめ込んだ店舗の主人公にはつきものの、例のてかてかした顔の色艶を見れば、この御仁がバリ市税務官でも勤めているか、

さもなくば最低、区役所の助役あたりの役付きになったことのある人物だらけのことは見當がついた。もちろんお察しのとおり、男の、これがまたプロンシャふうになつち張り出した胸に名譽勲章の略綬が麗々しくつけられていたのはいうまでもない。さて、得意満面、「殿様」馬車の座席の一隅に納まりかえったこの名譽勲章佩用者は、道を行き交う人々の上に、あてもない眼差をただよわせていた。パリではよくこんな具合に、居合わせぬ女の愛くるしい瞳を想って、思わず優しいほほえみがほころびると、それをそっくりちようだいするのはそこへ通りかかった通行人ということがよく起こるものだ。

「殿様」は走りつづけて大学通りがベル・シャス通りとぶつかる四つ角と、ブルゴーニエ通りとの四つ角、この二つの四つ角にはさまれた一画までくると、近ごろ建つたばかりの大きな建物の入口の前で止まった。その家は庭つきの古い館の中庭の一部に新しく建てられたもので、元の邸宅はそのまま手を入れずに、今では半分の大きさになってしまった中庭の奥に残っていた。

大尉殿が「殿様」からおりようとして御者の手を借り、その身振りを見ただけで、もうこの人物が五十の坂を越しているとわかってしまう。人間年はとりたくないもので、身振りのうちにまるで出生証明と変わらぬぐらい自分の年をあげすけに知らせてしまう、どうにもごま

かしのきかぬ鈍い動作が出てくるものだ。大尉は伊達な黄色の手袋を右手にはめ直すと、入口にいる門番には目もくれずに一階の玄関の石段をどんだん上がりかけたが、その身振り全体から「女はおれのものさ！」という自信のほどが発散していた。パリの門番連中ときたら人を見る目が肥えていることにかけては天下一品、建物の中に入ってくる人の中でも、青の軍服をつけ、勲章の略綬を飾り、しかもでっぷりと肥えて重たげな足どりでやってくる人間を呼びとめるような野暮な真似はするわけがなかった。そんな人物は金持にきまっていると、とっくの昔、百もご承知だったからだ。

この建物の一階を残らず占領して住まっているのはユロ・デルヴィ男爵閣下というわけだったが、同男爵は共和政時代には陸軍会計局長、元帝国軍主計局長官、今では陸軍省内部でも最重要の部類に属する局の局長を勤め、しかも国事院参議、名誉勲章勲一等功二級佩用、等々、数えきれぬほどの肩書きの持ち主であった。

このユロ男爵は自分からデルヴィという生まれた土地の名をとってユロの姓の後につけ加えたが、それは高名な兄のユロ將軍、帝国近衛軍、擲弾連隊連隊長で、一八〇九年の戦役の直後、皇帝陛下によりフオルツハイム伯爵に叙勲せられた人物、と間違われなためだった。この兄、とはすなわち伯爵のほうは、弟の面倒を親身にみ

て、陸軍の行政関係に入れるように取りはからってやった。こうした兄弟相俟つてのご奉公の結果は、ナポレオン皇帝の信頼と寵愛となり、一八〇七年以降ユロ男爵はスペイン方面軍の主計局長官に任命された次第であった。

玄関の呼鈴を鳴らした後、さっきの町人大尉殿はひとしきり軍服の皺を伸ばしたり、歪んだ着付けを正したり大童だった。それというのも洋梨そっくり、下腹の太鼓腹の振動のおかげで、上着が前といわず後ろといわずもうすつかりまくれ上がってしまったからである。

程なくお仕着せを着た召使が現われたが、来客の顔を見て一も二もなく中へ通すと、このものものしく尊大ぶつた人物を案内して客間の扉を開きながら、「クルヴェルさまのおいで！」と告げた。

まさに名が体を表わしているというにふさわしい、このクルヴェルという名前（フランス語の発音として、この名前を「は」大きくかつ滑舌な感を与える）」を聞くと、金髪で、まだ十分若々しさを保っている大柄な婦人が、まるで電流でも通されたようにぶるつと身震いして立ち上がった。

「オルタンス、好い娘だから、ベットねえさんと二人でお庭に行つておいで」と早口に、すぐかたわらで刺繍をしていた娘に言いつけた。

オルタンス・ユロ嬢は素直に立ち上がり、大尉殿にしようとやかに目礼すると、男爵夫人より五つも若いというの

に、すっかり年嵩としかさに見えるひからびた老嬢オールドミスと連れ立って、ガラス扉を押しして外へ出て行つた。

「きつとあなたの縁談にちがひなくてよ」と、ベットは従姉いとこの娘にあたるオルタンスの耳もとに口を寄せてささやいた。しかもそう言いながら、べつに自分のことをもの数にも入れず、娘といつしよに部屋から追い出してしまつた男爵夫人のひどい仕打ちに、いっこう腹を立てているらしい様子も見せなかつた。

事実また、この男爵夫人の一見身勝手な振舞といふものも、この従妹の身なりをご説明すれば、いくぶんご納得いただけようといふものであつた。

まずその着物といふのが、乾葡萄酒びんぶをしたメリノ毛織の地だが、その裁ち具合といい、縁ちちかがりといい、まさに王政復古時代の代物しろものだつた。縫い取りつきの飾り襟えりはせいぜいどう見積もつても三フランの値打といふところであらうか。かぶつてゐる帽子ときたらそれこそ、中央市場アムの女仲買の頭にもものつてゐるのをよく見かける空色の縞しま子の蝶結びを、ところどころにあしらつた麦藁あわわ帽ぼうそのものだつた。加えて山羊皮やぎかわの、それもその格好からいって、およそ最低の靴屋の作りと知れる靴をはいてゐるのを見ては、この家の事情に通ぜぬ者が、まさかベットの親類縁者だとは思わず、だからまたいったいどんな挨拶あいさつをしたものかと迷うのも不思議はなかつた。だいた

いベットは、日雇いのお針子はりこをつくりだつたのである。が、にもかかわらず、この老嬢は出て行く前にクルヴェル氏に向かつて愛想たつぷりな挨拶をしかけ、大尉のほうもなにか意味ありげに軽く会釈をかえした。

「明日はうちへ来てくださるんでしような、フィッセルさん？」と大尉が訊いた。

「でも、だれかほかにお客さまがありはしませんこと？」とベットが尋ねた。

「いいや、うちの子供たちとそれにあなただけですよ」と訪問客は答えた。

「なら、いいですわ」とベットが言つた。「明日間違ひなくお伺いします」

「さて奥さま、お指図をうけたまわりましょう」と、国民軍大尉が、あらためてユロ男爵夫人にお辞儀をしながら言つた。

そう言いながらもこの人物がユロ夫人を見詰めた目つきといつたら、ポワチエかクータンスあたりでどさまわりの田舎役者のやるタルチユフ（モリエール作、同名の喜劇の善者の典型。エルミ）が、役の性根しやうねをお客にとつくりわからせてやろうと、わざわざ念を入れて大袈裟おおげさにエルミールを見詰める、まったくその思い入れそっくりそのままだつた。

「どうぞこちらのほうにおいでください、あなた。大切

なお話をするにはこの客間よりは、ずっと都合がよいございませうから」と、ユロ夫人は客間と隣合わせの、家の間取りの関係上、カルタ室に使われている部屋をさしながら言った。

この部屋は、男爵夫人の居間とはほんの薄い仕切で仕切られているだけで、その居間の窓は直接庭に面していた。そこで二人がカルタ室に移った時、ユロ夫人は、だれも自分の居間に入ってきて話を盗み聞きしたりする者がなないようにと、クルヴェル氏を少しの間一人残したまま、居間のガラス窓や入口の扉をしめに行つた。そればかりではない、念のために客間のガラス扉まで閉じに行つたが、その時庭の奥にある古びた四阿あずまに腰をおろしている娘と従妹いととに笑いかけてみせた。カルタ室へ戻つてきながら、夫人はわざと客間との間の扉はあけ放したままにしておいたが、これは、もしだれか客間に入つてくることがあつても、客間の戸のあく音がすぐ聞こえるようにというわけだつた。こんなふうに行つたり来たりしながら、だれにも見られていないと知つて、男爵夫人は顔つきに、心の中で思つておることをすっかりさらけ出してしまつていた。そしてもし何人かこの時夫人の顔に注意した者があつたら、必ずやそこに表われた心の動揺に打たれ、恐怖に似た感じを抱いたことでもあらう。しかし客間の入口の扉からカルタ室まで戻つてくるほんの

わずかの間に、夫人の顔はふたたびあのつましやかなものでいて何物をもつてしてもその裏側を見透すことのできない表情、女なら、どんな裏腹のない人でも、いざとなれば思ひのまま、やすやすと取つたりはずしたりする例の仮面フェース、の下にすっかり隠れてしまつた。

この、まあどうみても奇妙な準備が行なわれている間中、国民軍士官殿は自分のいる部屋の調度をしきりにためつすがめつ見まわしていた。絹のカーテンは元々は赤だつたものが、陽焼ひやうやうけして紫色に色褪あせてしまひ、しかも長く使いすぎて髪かみのところところが擦り切れてしまつていた。絨毯じゆうたんはこれまた擦り切れて、もう色も模様もすっかりわからなくなつた代物だつた。家具類は金箔きんぱくも剝はげ落ち、張られた絹地は汚点だらけでところどころ裂け目ができていた。そしてこれらを眺める成り上がり町人の平べつたくて単調な顔には、軽蔑と自己満足と、そして物欲しげな野心の表情が次々と浮かんでは消えていった。クルヴェルが、古い帝政ふうの振り時計の後ろにかかつている鏡に自分の姿を写してみても、いろいろおのれの格好を吟味しているところへ、衣擦えされの音がさらさらとして、男爵夫人の戻つてきたことを知らせた。クルヴェルはそこで早速もとの気取つた姿勢にかへつた。

男爵夫人は、自分自身は、一八〇九年あたりには定めたいへん美事なものであつたにちがいない小さな長椅

子に身を沈めると、クルヴェルには肘掛椅子をゆびさしで坐るように合図をした。その肘掛椅子の腕木の先はスフィンクスの頭になっていたのだが、青銅色の塗りがところどころ鱗のように剝け落ちて、その後に木の地肌をむきだしに見せていた。

「ただいま、いろいろおやりいただきましたご用心は、男爵夫人、このわたくしにとつてまことに幸先のよいしるしでございまして、これでわたくしといたしましてもいよいよ、その……」

「いよいよ愛し愛される身として、でしょう」と、夫人が国民軍士官の言葉を引き取った。

「いえ、わたくしの心はともそのような、言葉などで言い表わされるようなものではございません」そう言いつつ男は右の手を心臓の上に当て、白目をむいてうっとりとした表情をして見せた。こんな顔つきは、惚れていない女が見たら、もうぶっと吹き出さずにはいられぬものだ。「愛している！ 愛されている！ そんななまやさしいものではございません、もうすっかり奥さまの魅惑の虜なのがおわかりになりませんか？」

二

「まあまあちょっと、クルヴェルさん」と、男爵夫人はとも笑うどころではなく、真顔で相手をさえぎった。

「あなたももう五十というお年を召していらっしやる。もちろんそれでも宅のユロより十も若いということはわたくしも存じております。が、それにしても、わたくしの年ぐらいの女になりますと、もう色恋沙汰があるにしてもそれ相応の理由がなければなりませんわ。相手が美貌であるとか、若さがあるとか、高名であるとか、優れた才能の持ち主であるとか。何かこうわたくしたちに何もかも、年甲斐さえも忘れさせて、眼をくらませて夢中にさせてしまうような、素晴らしいところのある殿方であればなりませんのよ。よしんばあなたが五万リールのお年で帳消しということになってしまいます。ですからつまりあなたは、女の欲しがるようなものを何一つお持ちでないわけですわ……」

「それではわたくしのこの恋心は？」国民軍士官は思わず腰を浮かすと、一歩前へ足を踏み出しながら言った。「このわたくしの恋心はいったいどうなるんです、この恋心……」

「いいえあなた、それはあなたのご執心というものですわ！」と、もういい加減にこのばかばかしい茶番劇に切りをつけたくなった男爵夫人がさえぎった。

「さよう、執心でもあり恋心でもあるわけですがね」と、相手は答えた。「まだそのうえにもっと強いものもござ

「いますよ、権利というねえ……」

「権利ですって？」とユロ夫人は思わず声を高めた、そしてその顔は一時に侮蔑と自負と怒りの念をみなぎらせて、気高いまでの威厳を帯びた。「が、まあなんにして」と夫人は言葉をつづけた。「こんな調子では、いつまでたってもお話が終わりはしませんわ。それにわたくし、なにもわざわざあなたをここまでお呼び立てして、もともとわたくしども二軒の家は親類ですのに、その中であなただけ疎遠になってしまわれた、その因の話を蒸しかえそうなどという気はございませんのよ」

「そうですか、しかし、てっきりその話だと思ったんだが……」

「まだあんなことを！」と夫人はつづけた。「あなたおわかりになりませんか？ わたくしが愛人だの、恋心だの、おそそ女にしてみたら一番話しにくいことがらでも、まったく平気でどんどん話すのをごらんになって、もう浮いた心はすっかりどこかへ行ってしまい、一生貞淑に暮らすつもりでいることが？ もうわたくしには恐ろしいものなんて何もありませんのよ。こうしてあなたと一つ部屋に閉じこもって人から疑いをかけられたところで、なんともありません。それにいったい、心弱い女がこんな真似をいたしますか？ だいいちあなたは、いったいなぜわたくしがあなたをお呼び立てした

か、よくご存じじゃありませんか！……」

「いいや奥さま、さっぱり存じません」と、冷やかな態度をとりながらクルヴェルは答えた。

そうして士官は不服そうに口をとがらせながら、元の気をつけの姿勢に戻った。

「そう？ それではお互いあまりいやな思いをしなくてすむよう、できるだけ簡単に申し上げましょう」と、ユロ男爵夫人はまっすぐクルヴェルの顔を見詰めながら口をきった。

クルヴェルはこれに対して皮肉たっぶりのつもりで頭を下げたが、その身振りには、その道のもが見れば、たちまち元は行商上がりとお里が知れる、どことなく卑屈なお愛想が感じられた。

「わたくしどもの息子はお宅のお嬢さまをお嫁にいただけきました……」

「もしやり直しがきくならば……」とクルヴェル。

「もしそうならば、今度はこの縁組はまっぴら！」と、すかさず男爵夫人が応じた、「と、そうおっしゃりたいのでございませう。そんなことだろうと思っておりました。が、それにしても、べつにあなたが不平をおっしゃることはございませう。うちの息子はバリでも一流の弁護士なばかりか、一年このかた代議士も勤め、議会の滑り出しも評判よく、この分では間もなく大臣にも